

《書 評》

Edith Foster & Donald Lateiner (eds.),
Thucydides and Herodotus

Oxford: Oxford University Press, 2012, pp.xiv+399.

青 木 千佳子

ヘロドトスとトゥキュディデスをめぐる評価の問題は、長年西洋古代史上の大きなトピックの一つとなってきた。本書は、題名からうかがわれるようにヘロドトスとトゥキュディデスの比較を前面に押し出した論文集である。その特徴は、何よりも二人の歴史家を「比較し考察する」といった手法にあり、ここまで比較が強く意識された論考で全編が構成されているものは、これまでほとんどなかったように思われる。

本書は、Introduction と 12 編の論文で構成されており、第 1 章 Introduction の後、第 2 章から第 5 章までが第 1 部 Methods of Reasoning、第 6 章から第 10 章までが第 2 部 Common Themes、第 11 章から第 13 章までが第 3 部 Reception にまとめられている。以下、本書の執筆順の通りにその内容をまとめて紹介し、最後に評者の感じることを述べることにしたい。

二人の編者 E. Foster と D. Lateiner による Introduction では、二人の歴史家に対する評価の変遷について整理されている。19 世紀以降「物語的歴史家」ヘロドトスと「実証的歴史学の祖」トゥキュディデスと全く対照的に位置づける傾向は、20 世紀後半ヘロドトスに対する再評価が行われるようになるまで続いた。古代以来、ヘロドトスは文体が評価されたものの内容について批判されることが多かったのに対し、トゥキュディデスは政治的軍事的な領域に限定した内容が古代の著作家によって歴史記述の模範と見なされ、重視されてきた。さらに 19 世紀以降、政治と合理主義を重視する時代がトゥキュディデスを「近代」に近い存在と考え、それにともないヘロドトスが酷評され、zero-sum 的批評が繰り返された、と Foster と Lateiner はまとめている。また、近年の研究の特徴にも触れている。すなわち、トゥキュディデスの演説や叙述にヘロドトスの影響を見て取ることであり、本書の目的もそのような方向にある、とする。さらに、本書では、ホメロスの歴史叙述への影響について検討することも視野に入れている。

第 2 章 R. B. Rutherford, Structure and Meaning in Epic and Historiography は、ヘロドトスとトゥキュディデスの比較だけではなく、ホメロスの叙事詩の特徴が二人の歴史叙述にどのようなあらわれているかを論じている。Rutherford は、まずホメロスの叙述の技法について

考察する。Rutherford によれば、長大な叙事詩をまとめるための技法で注目すべきものは、出来事を予見させる言葉があらかじめ語られる *direct foreshadowing* と場面や状況の繰り返しである。さらに、Fenik の研究を引き合いに出し、最初は些細なことが、叙述が繰り返されるにともない、より大きく深刻な事柄に発展していく叙述の構造をホメロスの二つの叙事詩の中で例証する。次に、ホメロスの叙述の特徴をふまえた上で、Rutherford はヘロドトスの歴史叙述の構成を整理する。ヘロドトスの歴史叙述の大きな枠組みとなる歴代のペルシア王の遠征について、キュロスとカンビュセス、ダレイオスとクセルクセスの二組の親子が対比して描かれている中にアテナイ、スパルタ、イオニアの叙述が呼応するように組み込まれており、叙述の構造が繰り返されていることを論じる。また、シケリア遠征に関するトゥキュディデスの叙述についても、ホメロスに用いられている技法が構造的に使われているとする。Rutherford は、二人の歴史家の関係だけではなく、ホメロスも視野にいれて叙事詩と散文、すなわち歴史叙述が叙事詩と全く別物ではなく、むしろ彼らにとって非常に近いものだったということを改めて浮き彫りにした。歴史叙述が散文として独立して誕生したわけではなく、ギリシアの文学の伝統の中で捉え直そうとする彼の試みは、第3章以下の論考の比較、対比の基礎として位置づけられる。

第3章 Ph. A. Stadter, *Thucydides as 'Reader' of Herodotus* は、トゥキュディデスがヘロドトスの叙述にどのように反応しているかについて取り上げている。表題の 'Reader' という言葉からは、トゥキュディデスがヘロドトスの歴史叙述を批判的に受け取っていたのではないという、Stadter の視点が感じられる。トゥキュディデスはヘロドトスの歴史手法をすべて排除したわけではなく、先人ヘロドトスを評価し再解釈していると彼は主張し、両者に見られる手法、場面の叙述、作品の構成について検討していく。まず、年代表記については、ヘロドトスがイオニアの反乱から年ごとに大きな事件に関連させていく年代法を用いていたが、トゥキュディデスはヘロドトスの年代法をさらに厳密にして、年と季節を常に記述する方法を用いたと指摘する。次に、トゥキュディデスがヘロドトスを意識しているとうかがえる叙述を取り上げ、作品の持つ構想もトゥキュディデスはヘロドトスを踏襲したと考えられる例として、トゥキュディデスの序文直後に現われるケルキュラの紛争の過程を分析する。すなわち、トゥキュディデスがスパルタとアテナイの戦争の直接的原因と考えているケルキュラとコリントスの紛争は、ヘロドトスの記述の冒頭に歴史の範例として出てくるクロイソスの話と呼応したものであり、ヘロドトスよりも顕著な形でトゥキュディデスは歴史的事件において人間性がどのように働くかを表そうとしたという結論を導き出す。

第4章 C. Scardino, *Indirect Discourse in Herodotus and Thucydides* は、間接話法がそれぞれの叙述の中でどのような働きがあるかについて検討し、ヘロドトスとトゥキュディデスの叙述に見られる共通点と差異を明らかにしている。この論文の特徴は、間接話法について事例が非常に詳細に分析されていることである。論者は、ヘロドトスとトゥキュディデスの叙述に現われる多数の間接話法に使われる動詞を整理することから始めて、両者の叙述を網羅

的に取り上げ、直接話法と間接話法との関係を見ていく。その分析から、どちらも対話をはじめるきっかけの問いや重要でない事柄についての演説、先に直接話法で語られたことの要約などに間接話法が用いられ、内容や方法も直接話法で語られるものと変わらないことが明らかとなる。ヘロドトスが用いる間接話法は大半が短く、抽象的なテーマを扱うことはほとんどないのに対し、トゥキュディデスは人物や事件の心理的な側面から状況の説明を補足するのに長い間接話法を使うことがある、とも論者は指摘する。このように、間接話法の使い方に若干違いは見られるものの、類似点の方が際立っていると結論づけている。

第5章 C. Rubincam, *The 'Rationality' of Herodotus and Thucydides as Evidenced by Their Respective Use of Numbers* は、ヘロドトスとトゥキュディデスの数字の使い方について考察する。Rubincam の論文には、先行研究である Keyser のコメントが付け加えられた数に関する記述の一覧表がついている。Keyser は、数字の扱い方を分析し、トゥキュディデスよりもヘロドトスの方が合理的な姿勢を見せていると主張したが、本論文は、この Keyser の論文をもとに個別の事例を検証していく形で考察が進められる。ヘロドトス自身は計算を好んで叙述中で披露しているのに対し、トゥキュディデスはヘロドトスほど計算といったことに関心がなかったという Keyser の主張を、Rubincam はおおむね受け入れつつも、その姿勢の違いから直ちにヘロドトスがトゥキュディデスよりも「合理的」だと断じる見解には反対し、数に対する扱いの違いは歴史叙述の方法の明白な違いによるものだとしている。そして、トゥキュディデスが厳密に史料を選択したために数の記述も簡潔になったと推測している。

第6章 H-P. Stahl, *Herodotus and Thucydides on Blind Decisions Preceding Military Action* は、軍事行動に先だってなされた誤った決定 (blind decision) について、トゥキュディデスとヘロドトスだけではなくホメロスにまで視野を広げて考察し、誤った判断から敗戦や破滅といった悪い結果に終わるパターンが共通してみられることを例証している。トゥキュディデスでは、メロス人とアテナイ人との対話とアテナイのシケリア遠征決議をめぐるニキアスとアルキビアデスの演説が考察されている。まず、メロス人とアテナイ人の対話を検討した Stahl は、シケリア遠征の失敗はメロスを壊滅させたことに対する罰というよりも、誤った選択の結果だとトゥキュディデスが考えていたのではないかと示唆する。そして、トゥキュディデスによるシケリアの地形の叙述と直後に続くニキアスとアルキビアデスの演説を丹念に追ってゆき、ニキアスとアルキビアデスの対照的な文言、そしてシケリア島の地誌についての叙述が、遠征という誤った選択を引き起こす当時のアテナイの状況を際立たせている、と指摘する。ヘロドトスについては、ギリシア遠征を決定したクセルクセスとアルタバノスの対話を取り上げられている。特にクセルクセスが遠征を決めるきっかけとなった夢については、ホメロスの叙事詩『イリアス』でアガメムノンの夢にネストルが現われて来る場面と合わせて考察される。総じて Stahl は、トゥキュディデスとヘロドトスの叙述の決定的な場面において共通項を見いだし、さらにその構造はホメロスにも現われることを明らかにしているのである。

第7章 D. Lateiner, *Oath: Theory and Practice in the Histories of Herodotus and Thucydides* は、誓い、誓約についての論考である。ギリシア世界のさまざまな場面で見られた法的、宗教的、政治的契約である誓いが、二人の歴史家の叙述にどのように表れているのかを整理している。Lateiner は、まず誓いの種類と現われ方に違いがあることを指摘する。トゥキュディデスの記述が国家間の外交的な合意にともなって行われる誓いに集中しているのに対して、ヘロドトスはギリシア以外の地域の誓いや時にはその手続きについて詳しく語っている。また、劇的な叙述の中に誓いが組み込まれている点が、トゥキュディデスと大きく異なる特徴である。一方で、トゥキュディデスもヘロドトスも誓いが破られる場合を記述しているのは同じだが、ヘロドトスは誓いを破った結果罰が下される結末まで記されているのに対し、トゥキュディデスにはそのような結果が記されることがない。このような違いは、二人が記録する戦争の性質の違いによるものだと Lateiner は推測する。

第8章 E. Foster, *Thermopylae and Pylos, with Reference to the Homeric Background* は、ヘロドトスのテルモピュライの記述とトゥキュディデスのピュロスの記述を、ホメロスも視野に入れて詳細に比較している。その比較から、両者の物語の構造が非常ににかよっていることを指摘する。両方とも記述が地形と要塞としての利点について述べることから始まっていることや、戦況が逼迫してきた時にキーパーソンが現われることなど挙げながら、その経過についても丹念に追っていき、類似性を見いだしている。また、類似性だけではなく、記述の差異から両者の特徴についても考察する。特に、ヘロドトスの描写では見られないもので、心理的な推移に従って戦況の描写をしているところは、ホメロスの手法を取り入れていると Foster は考える。

第9章 W. Blösel, *Thucydides on Themistocles: A Herodotean Narrator?* は、テミストクレスについてのヘロドトスとトゥキュディデスの叙述の特徴を整理し、トゥキュディデスの叙述が何を表すのか検討している。トゥキュディデスの叙述の中でもテミストクレスのエピソードは多彩で、トゥキュディデスの歴史叙述の特徴として一般的に知られている厳密さがあまり明瞭に表れてこない。このような違いについて、Blösel は、トゥキュディデスがアテナイの伝承やランプサコスのカロンからテミストクレスのエピソードを採用したためと指摘する。さらに、先入観の混じった伝承のためにテミストクレスの実像が前5世紀の時点で既にゆがめられ、トゥキュディデスが自らの叙述の手法を用いることができなかった、と推測する。そして、両者のテミストクレスの描写を比較して、両者ともに愛国者としてテミストクレスを評価し描写する点は同じだが、ヘロドトスがギリシア全体を守った者として描いたのに対し、トゥキュディデスはアテナイのために行動して後の繁栄の基礎を築いた政治家として描いている点で違いがあった、と結論づける。

第10章 R. V. Munson, *Persians in Thucydides* は、トゥキュディデスがギリシア世界でのペルシアの役割をどのように表しているのか、ペルシアについて何を知っていて何を重要視していたのか、こうした問題を考察する。Munson の分析から見えてくるトゥキュディデスの

ペルシアは、存在感の薄い「周縁」である。論者は、ペルシア人を無視するようなトゥキュディデスの「ギリシア中心主義」は、当時のアテナイがギリシア世界の支配に焦点を置いていた、政治的な状況を反映しているとする。さらに、Munson は、いわゆる「五十年史」の中でトゥキュディデスが触れるペルシアに関する記述について考察し、ヘロドトスと比較して明らかな違いがあることを指摘する。つまり、ペルシアについての情報は、ヘロドトスの方がトゥキュディデスよりも詳しく、トゥキュディデスがペルシア人に注目するのは、もっぱらギリシア人の利害に関わる時だけである。アルキダモス戦争に入ってから記述でも、トゥキュディデスはペルシアについて、スパルタが交渉に失敗したことしか書いておらず、あくまでもペルシアは脇役としての扱いである。ペルシアの記述が増えてくる第8巻の歴史叙述の方法がヘロドトスに近いものの、トゥキュディデスの目から見たペルシアは王が君臨する一つの国というよりも辺境の一地域でしかないことに変わりがない。結局、トゥキュディデスはペルシアについて特別な関心を見せることがなかった、と Munson は結論づける。

第11章 Ch. Pelling, *Aristotle's Rhetoric, the Rhetorica ad Alexandrum, and the Speeches in Herodotus and Thucydides* は、*Rhetorica ad Alexandrum* とアリストテレスの『弁論術』で論じられる弁論の要素と関連させながら、二人の歴史叙述で重要な役割を果たしている演説の特徴について考察する。アリストテレスは、『弁論術』の中で、説得のためになされる弁論のさまざまな要素を定義しているが、その中から、「憐れみ」、「恐れ」、「利益」、「正義」の徳目に Pelling は注目し、とりわけ「利益」と「正義」が演説の中でどのように関連づけられているか分析する。Pelling の関心は、主にアリストテレスとトゥキュディデスに向けられており、ヘロドトスに関する言及が若干少ないように思われるけれども、「正義」が道徳的側面と結びつけられて言及される点でトゥキュディデスの演説と違いがないことを認めつつ、ヘロドトスの演説は従来言われていたような「正義」という言葉だけでその特徴を表されるのではなく、道徳的側面や「利益」に表される実用的な側面も考慮に入れるべきであると、彼は提案する。一方、トゥキュディデスにおいては、「正義」と「利益」が相手を説得する要素として巧みに配置されていることを例証し、さらに、はじめは演説の中で「正義」について多く言及されていたが、戦争の経過が進むに従って、「利益」という言葉が「正義」と結びつき取って代わる傾向を指摘する。

第12章 E. Baragwanath, *A Noble Alliance: Herodotus Thucydides, and Xenophon's Procles* は、クセノフォンの歴史記述について、ヘロドトスとトゥキュディデスの影響がどのようにあらわれているかを考察する。前371年レウクトラの戦いでスパルタに勝利したテバイは、勢力を拡大しペロポネソスへ侵攻した。その際、スパルタと同盟を結ぶようアテナイを説得し同盟締結に貢献したとクセノフォンが賞賛した人物が、プレイウスのプロクレスである。クセノフォンの叙述の中に、プロクレスによる演説は2つ記述されており、Baragwanath は、プロクレスの演説が意味を検討する。アテナイに援軍を求めたスパルタをプロクレスが援護した一つ目の演説の考察から、その演説が友情、感謝といった倫理的側面が現実的軍事的側

面よりも強調されて語られているとする。一方、その後の同盟交渉で陸海の指揮権をスパルタとアテナイにそれぞれ分割することを提案するプロクレスの第2の演説には、トゥキュディデスの見解やペリクレスの演説を彷彿とさせるような語彙や表現が見られると同時に、人間の幸福について述べられている部分ではヘロドトスのソロンの言葉との関連を指摘する。クセノフォン自身の「国家が小さいのに、多くの立派なことをなした場合にこそ、報告する義務がある」という言葉がヘロドトスの序文に込められているとして、トゥキュディデスとの関わりが強調されてきたクセノフォンの叙述にヘロドトス的な要素も含まれている、と彼女は主張する。

本論文集最後の第13章 I. Smotta, *Herodotus and Thucydides in Roman Republican Historiography* は、ヘロドトスとトゥキュディデスがローマ共和政期までの間、どのように受容されていたかを概観している。ローマの歴史叙述は断片しか残されていないものが多く、この論考は直接史料を比較して考察するというよりも、断片を用いてかすかな跡を追っていく形で進められる。ヘレニズム期の歴史叙述は、トゥキュディデスよりもヘロドトスが好まれたが、ローマにおいては、最初のローマ史をギリシア語で著したファビウス・ピクトルに見られるように、トゥキュディデスとヘロドトスの両方が引用されており、彼の読者にとってギリシアの歴史家が当時よく知られていたことがわかる。ところが、ローマは拡大していくに従って、ギリシアの歴史家をローマ人の遺産と位置づけるが、ギリシアの歴史叙述の枠組みや内容から離れて政治的・軍事的にギリシアに勝ったように文化的にも優位に立とうとした、と Smotta は指摘する。また、前1世紀後半から古代ギリシアの著作に回帰することを提唱したアッティカ主義では、ヘロドトスよりもトゥキュディデスが総じて好まれたが、その関係を深く考慮されることはなく、同じ時代の歴史家というカテゴリーにまとめられてしまい、もっぱら実用的な観点からギリシアの歴史叙述が評価されたと論じている。

以上が本書の内容だが、最後に気がついた点をいくつか述べておく。冒頭にも触れたように、本書最大の特徴は、二人の歴史家の徹底的な比較研究であるが、二人の歴史家の比較だけにとどまらず、ホメロスも視野に入れ、叙事詩と歴史叙述の関係を捉えようとした点も本書の特徴として挙げることができるだろう。叙事詩と歴史叙述の関係については、J.B. ベリー、藤縄謙三氏、中務哲郎氏の著作¹⁾ にも見られるように、これまでたびたび指摘されてきており、その着眼点が目新しいわけではない。けれども、ホメロス、ヘロドトス、トゥキュディデスの叙述の構造を詳細に比較検証し、類似性を具体的に提示した第2章の Rutherford 論文をはじめ、複数の論文でホメロスの叙事詩が常に意識され考察の中に組み入れられた点は非常に意義深いと言える。

また、トゥキュディデスがヘロドトスを評価したと主張する第3章の Stadter の論文のように、二人の歴史家を前5世紀ギリシアの社会的、文化的背景の中に捉え直そうとした視点からそれぞれの叙述を比較した論考が見られたことも興味深い。トゥキュディデスがヘロ

ドトスに対して向けた「批判」は、近代以降の研究者によって拡大解釈された「批判」であり、二人の歴史家の関係を再考するためには、「批判」そのものが何を意味するのかを考え直す必要があるだろう。そのような視点から展開された Stadter の論文は、ヘロドトスとトゥキュディデスを単に比較して叙述の特徴の異同を導き出すだけにととまらず、トゥキュディデスがヘロドトスの叙述をどのように受容し自身の叙述に消化していったのかについて考える上で、新たな視座を提示しているようにも思われる。

叙述の構造について比較した論文では、二人の歴史家の類似性を導き出す結論が目立ったが、具体的なテーマにしぼって比較した論文の中には、それぞれの叙述の特徴の違いを明らかにしたものも見られた。特に、宗教的な叙述が少ないトゥキュディデスに、誓いという宗教的な行為に着目して考察を意欲的に試みた第7章の Lateiner の論文と、ペルシアについての両者の言及を扱った第10章の Munson の論文では、考察の結果、二人の歴史家の叙述に違いがあるという結果が導き出されている。両者の特徴がさまざまな側面から改めて確認されたことで、本書の議論が共通点を示すだけではなく、差異も意識した奥行きのあるものになっている。

一方、気になったのは、比較できるテーマがどうしても限られるためか、複数の論文で重複した議論が散見された点である。例えば、第3章の Stadter の論文と第8章の Foster の論文では、どちらもテルモピュライとピュロスの叙述について同じような比較と考察が続き、他の論文では、メロス人とアテナイ人の対話やニキアスとアルキビアデスの演説が繰り返し取り上げられていた。論文集でこのような重複はある程度仕方のないことかもしれないが、どの論文も基本的に、二人の歴史家の共通点を導き出す傾向が強かったため、議論の展開が時折冗長に感じられたことは否めない。

そのような冗長さがあるとはいえ、対照的な特徴から二項対立的に評価されてきた二人の歴史家の関係を見直し、ギリシアの文化的背景の中に捉え直そうとした本書の試みは、ヘロドトスとトゥキュディデスのそれぞれの歴史叙述についてその成果を還元し再検討していく上でも示唆に富んでいる、と評価できるだろう。

最後に付け加えるならば、国内でも、二人の歴史家を連関させて取り上げたものとして、桜井万里子氏や大戸千之氏の著作²⁾がある。両者ともに二人の歴史家の特徴を明快に捉えており、学ぶべきことは非常に多い。歴史学の課題と可能性を考える時、歴史学の源流としての古代ギリシアの二人の歴史家についての比較研究がさらに充実することを期待したい。

註

- 1) J. B. ベリー『古代ギリシアの歴史家たち』高山一十訳、修文館、1990年、9頁～37頁。藤縄謙三『歴史学の起源 ギリシア人と歴史』力富書房、1983年、47頁～51頁。中務哲郎『ヘロドトス『歴史』世界の均衡を描く』岩波書店、2010年、21頁-26頁。
- 2) 桜井万里子『ヘロドトスとトゥキュディデス 歴史学の始まり』山川出版社、2006年。大戸千之『歴史と事実 ポストモダンの歴史学批判をこえて』京都大学学術出版会、2012年。